

隔月連載

「イザベラ・バードの道」を現代に活かす

第 2 回

イザベラ・バードの見た自然・会った人たち



『日本奥地紀行』ルート図
(『イザベラ・バード紀行』伊藤孝博著、無朋舎出版、2010年)

辻井 達一 (つじい たついち)
財北海道環境財団理事長

窪田留利子 (くぼた るりこ)
イザベラ・バードの道を辿る会事務局長

1 『日本奥地紀行』における自然事物の描写

1800年代後期の北海道の人口は約2万人であった。これは面積比率からすればほぼ現在のアラスカ州のそれに近い。とすると、イザベラが見た当時の北海道には鮭が群れをなしてあふれんばかりにさかのぼり、山にも平地にも豊かな森林が見られたのはむしろ当然だ。海岸のほとんどはまさに自然海岸であり、室蘭から苫小牧を経て富川までイザベラはその自然海岸の風景の中を歩いたことになる。彼女は日高路の入り口、勇払海岸を次のように描写している。

これはヘブリディーズ諸島（スコットランド西北の諸島で千島列島に相当する）の砂地に似て、砂漠のようにもの淋しく、ほとんど一面に矮小な野ばらや釣鐘草におおわれている。どこまでも好むままに道をつけて進めるような草原である。

それこそ今で言う原生花園の中を歩くわけで彼女は楽しんだのではないか。

ここに記されている「矮小な野ばら (dwarf roses) と釣鐘草 (campanulas) (高梨訳^{※1})」とは、海岸部であることから明らかにハマナスとツリガネニンジンであると思われる。その少し前に通り過ぎた白老から苫小牧への道筋、おそらくは今の錦岡から糸井にかけてではもっと詳しく、次のような描写がある。

北海道の特色として小さな野ばら（ハマナス）がある。深紅の花を咲かせ、オレンジ色の実をつける。実は枇杷の形をしており、野生の林檎ほどの大きさである。その花冠は直径3インチである。

これはまさにハマナスを示している。イザベラは多分、ここで初めてハマナスを見たものと思われる。高梨訳でいう「枇杷の形 (medlar-shaped hips) の実」は、正しくは「カリン (花梨) に似た実」とでも訳すべきで、ハマナスの実には似ていない。



ハマナス
Rosa rugosa



ツリガネニンジン
Adenophora triphylla var. japonica

※1 以下、主として高梨健吉訳『日本奥地紀行』平凡社2007年による。



海岸草原の記述はさらに続く。

そのほかに、バラのように赤色をした大きな昼顔（ヒルガオ）、鈴のような青い花を並べた釣鐘草（blue campanulas→ツリガネニンジン）、頭巾型で紫色の花を付けているトリカブト（*Aconitum japonicum*→*A.yesoense* エゾトリカブト）、誇らしげに咲いているハマヒルガオ、紫色のエゾギク（エゾノコンギク）、ユキノシタ（*Parnassus*→*Parnassia palustris* ウメバチソウ、ユキノシタ科ではあるが属は異なる）、黄色い百合（多分、この海岸に多い*Hemerocallis yezoensis* エゾキスゲ）、それから特に目立つ蔓草があり、その葉は荒野の環境に全く似合わぬ優美な姿をして、紫褐色の花を付けるが雄蕊の特殊な配列と、緑色の雄蕊、そして腐肉のようにとても厭な臭いを出すのが特色となっている。（これは間違いなく*Codonopsis lanceolata* ツルニンジン、ちょうどイザベラの旅行時期に咲く）。これは多分、受精のために非常にいやな姿をしたある種の蠅を惹きつけるためのものであろう。

※ 以下（ ）書は本稿の著者による注釈。

この観察も正しい。イザベラはなかなか細かいことまで見ている。

この少し前には水辺の植物の記載がある。これは白老の海岸の湿地と沼の描写である。



エゾトリカブト
Aconitum yesoense



ハマヒルガオ
Calystegia soldanella



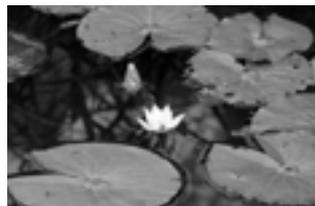
エゾノコンギク
Aster ageratoides f. yezoensis



エゾキスゲ
Hemerocallis yezoensis



ツルニンジン
Codonopsis lanceolata

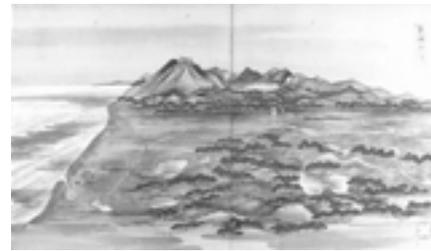


エゾノヒツジグサ（金澤晋一氏）
Nymphaea tetragona v. tetragona

道路は13マイルの間全く平坦で、砂利の平地や沼地を通った。非常に単調ではあったが、道そのものの野性的な魅力があった。沢があって、鴨がおり、小さくて白い花の睡蓮が咲いていた（*Nymphaea tetragona v. tetragona* エゾノヒツジグサ）。

森林はほとんど海岸線近くまであり、それは現在のアラスカや沿海州の風景に似ていたはずである。それとかなり近い風景を私たちも例えばサロベツ海岸とか枝幸あたりに見ることができる。

湿地や原野はどうだろうか。イザベラの歩いた勇払原野は目賀田帯刀^{※2}の勇払越え絵図そのものだったに違いない。その片りんは、なお勇払に残っている。



『北海道歴検図 胆振州（下）
勇払山道』
目賀田帯刀（北海道大学
附属図書館所蔵）

彼女の最終目的地とした沙流川流域については、かなり細かい描写がある。イザベラ・バードは平取をその最終目的地としていたから、現在の富川から沙流川に沿って内陸に入った。沙流（Sar）は湿地を意味するが、平取から下流はまさにその名の示す広い三角州（デルタ）の見られるところで、それは沙流川の運積物がつくった。現在でも去場（まさにサルバ→サルパ=湿地）の字名がある。沙流川は今でも暴れ川として有名だから、当時はもちろんのべつにその流路を変えていただろう。ここをイザベラ・バードは馬でさかのぼっているが、「湿地に落ち込んで馬の頭を越えて前に跳び降りた」と書いている。途中には「道の両側は丈の高い草が生えていて、すぐに（濡れた草の露で）ずぶぬれになった」。これは今でもたくさん生えているオオイタドリ、チシマアザミ、エゾノキツネアザミ、オオヨモギ、エゾイラクサ、それに湿地に多いヨシ、イワノガリヤスなどの群落のことだろう。北海道はヨーロッパに比べるとはるかにこうした大形草本が多

※2 目賀田帯刀（1807～1882）

幕吏、画家、谷文晁の女婿。安政5年、幕命によって北海道、樺太を調査・測量し、各地の沿岸を描いた。その画は『北海道歴検図』として後に明治4年、開拓使の要請で清書、提出されたもの。



い。彼女もそのあたかも熱帯か亜熱帯をさえ想わせる大型草本に目を見張ったのではないか。

富川すなわち沙流川の河口から平取（現在の平取本町地区）までは、それでも15~20kmしかないから、沙流川を途中で渡るという手間がかかったにせよ、そして馬で湿地を突破したにせよ、それほど時間はかからなかったはずである。

イザベラ・バードは途中まで左岸を歩いたが、今の紫雲古津川向大橋の架かっているあたりで、たまたまそこにいたアイヌの丸木舟で沙流川の右岸に渡してもらい、多分、今の紫雲古津か、去場のあたりから今度は右岸側を上流へと向かった。ヤナギ、ハンノキ、ケヤマハンノキ、ドロノキ、そして少し上手にはハルニレやオヒョウなどの林の中を通ったはずである。オヒョウ、シナノキの樹皮でつくられるアツシは有名な樹皮布である。沙流川では両方あるが、オヒョウのほうが多く用いられていたらしい。それもやや若い木の樹皮が用いられるというから、沙流川沿いの河畔林から得られたものであろう。河原そのものではないが、河原に沿った部分、つまり低い河岸段丘に生えていたものと思われる。

トリカブトは最も知られていた有毒植物で、多くの民族が古くから矢毒として利用してきたものだ。現在



紫雲古津川向大橋の上から望む、沙流川上流地域
(窪田留利子)

の沙流川流域では目立つほどの群落はないが、イザベラの訪れた時代にもそうだったろうか。矢毒としてどれほどの分量がこのイオル^{※3}が必要であったかは分からないが、イザベラの記述による限りではそれほど大きな集落であったとも思えない。したがって、そう需要が大量でなければ、谷筋のあちこちで生えているもので十分にまかなえたと思われる。この辺りの種類としてはエゾトリカブトがある。(明治17~18年頃まで、平取・門別地区はトリカブト・イオルであった)。

イザベラが平取で訪れたのは平村ペンリウク家であった。家の外装は茅^{かや}=ヨシで覆われていた。材料のヨシは約1400束（一束は直径約40cm）と推定される。これは相当のヨシ群落がなければまかないきれない。水田とトマトのビニールハウス化した現在の沙流川デルタでは到底、供給は困難である。イオル計画によって2009年春に二風谷アイヌ文化博物館前に建設を見た新しいチセ（家）(97㎡)には苫小牧・勇払産のヨシが用いられた。これは4tトラックで2台分であったという。

さて、動物についてはどうだろう。熊に出会った、という記述はない。狐^{うさぎ}や兎そしてエゾリス、シマリスなどについても同様である。8月というのはそういう動物に会うチャンスは少ないのかもしれない。けれども鹿だけは1カ所、平取からの帰途に白老を再び通つ



オオイタドリ
Reynoutria sachalinensis



エゾイラクサ
Urtica platyphylla



ケヤマハンノキ
Alnus hirsutalaciniata



ドロノキ
Populus maximowiczii



ハルニレ
Ulmus japonica



オヒョウ
Ulmus laciniata



フレデリック・スターが撮影したペンリウクの自宅『The Ainu group at the Saint Louis exposition』Frederick Starr (1904) 引用

※3 イオル (ior,iwor,)

アイヌ民族の持っていた生活領域の概念。狩猟・採集などのテリトリーも含まれる。日高地方の流域圏において顕著で、最初、泉靖一（文化人類学、東大東洋文化研究所教授、始めアイヌ民族、後、インカ帝国などの調査を手掛ける。1915~1970）が「沙流アイヌの地縁集団におけるIWOR」という論文で発表した。

た時に、白老川をさかのぼったところで「鹿の姿も見た、うまい具合に猟師が立派な牡鹿を1頭仕留めて持ってきたので、私は夕食に鹿肉のステーキを食べた」と書いている。鮭など魚類についてもそうで、後に述べるように食べてはいるが、川で見た、という記述はないのだ。

ただし、鳥については、ここに挙げた白老での鹿を見た、という記述に続いて「雉もたくさんいた」と書いている。しかし、このキジについてはブラキストン^{※4}がクレームを付けていて、「蝦夷にはキジはいない、ヤマドリ=エゾライチョウ (*Tetrastes bonasia*) だろう」と述べている。

平取付近についてイザベラはあまり、というか、ほとんど樹木のことに触れていない。ところが、函館への帰途の白老-室蘭-伊達-有珠-長万部-森-函館への噴火湾岸をたどるルートでは、しきりに樹木の名前が出てくる。有珠の善光寺では、櫟の木、そして例の難所の礼文華峠では、

杉の森林は深い影を落とし、真っ赤な楓の枝葉や、真紅の葡萄の花綱が、暗闇を明るく照らしている。内陸の景色は無限を暗示していた。森林におおわれた山々には果てしがなく、光を通さぬ峡谷には底知れぬものがあるように思えた。……特に美しい銀杏の木は、小さな扇形の葉をつけ、一面に蔓草が絡んでおり、低くて黒い葉をつけた竹藪から突き抜けて聳えている。

ここで私は、1本の大きな銀杏の木を見た。高さは地面から3フィートで、8本の高い幹に分かれ、どれも直径が2フィート5インチ以上であった。この木は早く生長しわが英国の気候によく適応しているのだから、ロンドンのキュー植物園で誰もがみられるようにどうして大規模にとり入れられないのか、ふしぎである。この他に球形の葉が対になっている木があり、非常に大きく生長している。

これは明らかにイザベラの見間違いでカツラを見誤ったものだ。イチョウの大木が自然にこのあたりで生え



エゾシカ (伊吾田宏正)



ヤマドリ=エゾライチョウ (*Tetrastes bonasia*)
日高町図書館郷土資料館収蔵

ていることはあり得ない。か、ひょっとしたら例えば善光寺などは早く入っていたかも。

「高さは地面から3フィート(約1m)で、8本の高い幹に分かれ」というのもカツラの性状と一致している。すると、この文章の最後に出てくる「球形の葉が対になっている木」は何だろうか。これこそカツラの特徴なのだが。それ以外で一番、近いのはハクウンボクくらいだが、その葉は対生ではなくて互生なのだ。

こうした間違いは、別のところにもある。平取での記述(第36信)の中で、佐瑠太から平取へのルートで「森林の樹木は、ほとんど神樹 (*Ailanthus glandulosus*) と櫟 (*Zelkova keaki*) だけである」「森林の樹木は、ほとんど柏と榆だけである」。としてあるのは両方共に間違いで、シンジュ(神樹)はまだ北海道へは移入されていないから多分、葉の付き方からしてオニグルミ、ケヤキは、これは明らかにハルニレの見間違いだろう。観察眼というより植物分布の知識の欠如だ。

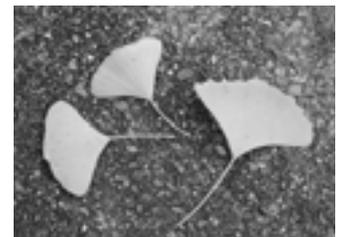
帰途の長万部から森を通過して函館へのルートでは、

森と蓴菜沼との間の森林は、私が前に見たときには、陰鬱な暗い日だったので、とても美しいとは思わなかったが、今回は、太陽が輝き、光と蔭が豊富に模様を作り、紅葉した樹木や真紅の蔓草が多く、谷間には燃えるような紅葉があり、色彩の音楽で私を楽しませてくれた。

「紅葉した樹木や真紅の蔓草」とは何だったのだろうか。あるいは駒ヶ岳山腹のナナカマドであろうか。あるいはまたヤマウルシであったかとも思われる。そして真紅の蔓草とは間違いなくツタウルシのことを指すものだろう。



カツラ *Cercidiphyllum japonicom*
『宮部鉦・工藤裕舜著：北海道主要樹木図譜』
出典



イチョウ *Ginkgo biloba*
(辻井達一)

※4 トーマス・ブラキストン (Thomas Wright Blakiston, 1832~1891)
イギリス出身の軍人・貿易商・探検家・博物学者。幕末から明治期にかけて日本に滞在した。津軽海峡における動物学的分布境界線の存在を指摘、この境界線はのちにブラキストン線と命名された。

2 『日本奥地紀行』に見るアイヌの自然観

イザベラはアイヌ民族が自然の全てを生きたものとして大切に扱っている、あるいは自分たち人間（つまりアイヌ＝ヒト）に与えられる恩恵として感じ取っていたようだ。

アイヌは決して余分に消費せず、得たもの一自然から（カムイから）与えられたものを感謝して用いる態度には一神教と多神教の相違を越えて共感するものがあったのではないか。

物を（たとえば壊れたものを）捨てるときにも、祈りを捧げるとするのは、さらにその思想の完結性を示すものだろう。今、しばしば使われる「勿体ない」精神に近い。

もう一つは熊の崇拝に見られる自然への畏れと、同時に一種の輪廻の思想とである。肉が熊のかたちで贈られること、それを恵みとして受け取って丁重に扱い、深い感謝を捧げれば再びその扱いにふさわしい恵みを与えられるという思想だ。

丁重に扱えばクマは“肉という衣服をまとめて”再び現れるのである。イザベラはこの思想に基づく熊送りの風習もほとんど何の抵抗もなく受け入れているように見える。不思議がりもせず、奇妙とも批評していない。

さて、強いものに対する畏れや敬いの心は多くの民族にほとんど共通してみられることである。雷、風などの自然の事物、ライオンや虎、豹などへの敬いの念とそれを表したり模したりする衣服、冠などは少なくない。シャーマンや首長がそうした服装をするのもしばしばみられることだ。

西欧諸国の王や貴族、そして都市の紋章にもしばしばライオン、熊、鷲や鷹が用いられているのではないか。それらになぞらえて強さを示したりするのはあるが、熊を崇めてかつ、それ故に再び肉として与えられることを期待するのはあるいはアイヌ民族に限られるのではないかと思われる。このあたり、専門家の意見を待ちたい。

イザベラがそこまで見通したかどうかは分からないが、彼女の記述からは少なくともそれを異様だとは思

わなかったようだ。アイヌ民族が自然により密着していた、あるいは自然のサイクルの中に自分たちも含めていたとするのは考えすぎだろうか。次のような記述がある。

明らかに彼らの宗教的儀式は、大昔から伝統的に最も素朴で最も原始的な形態の自然崇拝である。漠然と樹木や川や岩や山を神聖なものと考え、海や森や火や日月に対して、漠然と善や悪をもたらす力であると考えてきている。

同じことは樹木など植物についても言えそうだ。アイヌ民族は樹木にも草にもいわば順位を付けている。それは極めて実際的な評価に基づくものであって、役に立つ樹木は高位に置かれる。たとえばニレやオヒョウは高い地位にある。ニレは火を付けやすいところから、オヒョウは樹皮がもっとも優れた樹皮布の素材になるからだ。

しかし、たとえばヨシやカヤなどは役に立つ重要な素材ではあるが多く生えていて容易に集められることで割と低く見られている。それは動物でいえばシカがそうで、これも重要な食料であるにもかかわらず、数が多く、クマに比べれば獲るのがはるかに容易であることと似ている。

鮭もまた同じ扱いを受けている。これも極めて重要な食料である上、衣服や靴などにも用いられるのだが、なにしろ数が多くて多量に漁獲されるからだ。それでも、漁獲に当たっては最初にさかのぼってくるものと、最後にさかのぼってくる集団とを獲るといって、極めて生態学的な漁獲方法が採られるのは見事だ。優れた個体を残し、しかも脂身の少ない保存に適した個体を選んで獲る、という考えなのである。

鮭はアイヌ民族にとって、もっとも重要な魚であり、食料であった。ここでいう鮭にはシロザケ、ベニザケ、



二風谷に復元されたアイヌ家屋群（柳秀雄）



カラフトマス（セツパリ）、トキシラズ、イトウ^{※5}（チライ・アパッポ）、ヒメマス（カバチェッポ）などが含まれる。

食料としてだけでなく、ケリ、すなわち靴や、衣服の素材にも使われるいわゆる魚皮衣である。

イザベラが平取へ達したのは8月だから、まだ鮭の遡上^{そじょう}の最盛期ではなかったし、クマやシカの狩猟期でもなかった。だから彼女は直接にはそうした採捕の様子を見ることはなかった。家の中で囲炉裏^{いろり}の上にはぶら下げられた鮭を見てイザベラはどこまでそうしたことを見通したか。

もっとも鮭が既にさかのぼっていたらどうか、白老で宿泊した時の記録に、

伊藤はたいそうきれいな新しい宿屋を選んでくれた。そこは道路に面して四つに仕切った厩^{うまや}があり、その真ん中に伊藤がおり、今、新しい鮭の厚い切り身を炭火で焼いているという嬉しいニュースを知らせてくれた。

と書いていることでわかる。

アイヌ民族の宗教に対するイザベラの受け取り方は、「既にもっている自らの神（もちろんキリスト教の神）を至上のものとして」考えている。

しかし、そうではあっても、イザベラは当時の西欧からの旅行者の中では比較的、アイヌ民族の自然観、そして“神（カムイ）”について、かなり理解的であったのではないと思われる。

たとえば、こうした記述がある。

明らかに彼らは、これらの神々から最大の利益を得ており、彼らの素朴な考えの中に感謝の念がしみ通っている。狩猟と漁獲の季節が終わるとき、あちらこちらで行われるアイヌの大祭のときに唱えられる素朴な文句の中にも窺われる。

“私たちが養ってくれる海に対し、私たちを守ってくれる森に対し、私たちは深い感謝を捧げる。あなた方は同じ子供を育てる二人の母です。一方を去って一方へ行っても、決して怒らないで下さい” “アイヌ人は常に森と海との自慢の種となるでしょう”。

この文章はまさに人の心を打つほど美しい。アイヌ民族の自然観を大きく示すのに十分というべきであろう。イザベラがこのように聞き取り、感じ取ったなら、彼女の観察は鋭く、見事であった。ただし、これがあのガイド、伊藤を通じてこれほど見事にイザベラに伝えられたものかどうか。あるいは、むしろ伊藤を介しての聞き取りそのままではなくて（こんなに見事に通訳できるとは思えないから）イザベラが感じ取った意識であるとみたほうが当たっているのではないか。むしろそのほうがイザベラの感得したアイヌ民族の自然観であるように思える。

“イザベラ・バードの見たアイヌの自然観”は、これで尽きていると思われる。女性の眼で見、感覚で捉えた自然児アイヌ民族の自然観であると言えるだろう。彼女は科学者ではなかったが、それでも全くの素人でもなかった。その記録の各所でもかくも植物を学名で記しているし、そうした教養は身につけていた。もっとも、それについても「むやみに、必要もないのに学名で仰々しく書くな、とブラキストンは言っているが。少なくとも「素人としてはかなりいいところを見ている」くらいに言ってもよかったのではあるまいか。

イザベラ自身も、日本奥地紀行の端書きで、こう書いている。

私の旅行コースで、日光から北の地方は、全くの田舎で、その全行程を踏破したヨーロッパ人は、これまでに一人もいなかった。女性の一人旅であり、私の旅行した地方には、はじめて西欧の婦人が訪れたというところもあり、私の得た経験は、今までの旅行者のものとはかなり大きく異なるものがあった。

これはまさにそのとおりなのであった。

イザベラはこう記している。“実に大自然に不調和は存在しない（No! Nature has no discords.）”。彼女は自分自身も、自然はそもそも調和のとれたもの、とみていた。そこにアイヌ民族の自然観に共感するものを見出したのではないか。

※5 イトウは、かなり重要な位置を占める。呼び名はチライ、オピラメなど各地でかなり異なる。大型であり、一種の尊崇の念をもって見られていた。